

大河ドラマ一考



永岡 慶之助
(作家)

毎年、九月に入ると、来年一月から始まるNHKの大河ドラマの話題が、マスコミを賑わす。

新聞や、週刊誌、テレビの朝や昼のワイドショー番組などで、盛んに、配役は誰それだとか、時代背景はどうだとか、ロケ地は何処に決まった、などと、視聴者の期待を、いやが上にもふくらませてくれる。

去年（二〇一四年）の秋にも、初の群馬県令（今という知事）となった、榊取素彦が主人公だということで、群馬県内は大盛り上がりであった。

地方紙でも、タブロイド版で特集を組み、保存版と抄し、配役や、登場人物の相関図や、歴史的背景について、かなり詳細に説明したものが、折り込まれていた。我家でも、大事に保存しであるほどだ。

それに付け加えて、榊取素彦役と、最初の妻役になった俳優が、群馬県庁を訪れたり、「ぐんま花燃ゆ大河ドラマ館」なるものを、群馬県庁の昭和庁舎に設け、「榊取が愛した『第二の故郷』前橋」の絵地図などを揚げ、榊取が、いかに群馬の産業振興に、力を注

いだか、文化財の保護に努めたか、教育の推進、普及のために多くの小学校建設を指導したか；等々、枚挙にいとまがないほど話題作りをしたものだから、群馬が舞台になるのを、心待ちにしていた。

さてさて、いよいよ正月明けの、第二週の日曜日、早めの夕食をすませ、風呂にも早めに入り、期待に胸ふくらませつつ、夜八時、テレビを前にくつろぎのスタイル。

「花燃ゆ」というタイトルなのか……。おや？ なんだか変だなあ、吉田松陰の話なのかなあ。どうも、思っていた話とは、ちょっと違うようだ；その想いが半年以上も続いた。

と、云うのも、一月に始まり、八月頃まで吉田松陰と、高杉晋作の話が主で、まるで朝ドラマのような進行具合であったからだ。

おまけに、榊取素彦の後添いとなった吉田松陰の妹のエピソードが、満載で、一体、何時になったら、群馬でのストーリーにたどりつくのやら

と、見続けていると——廃藩置県で、すったもんだの末に、今の形になった群馬県が誕生したのが、明治四年（一八七二）十月二十八日、それに合わせようとしたのか、その時、熊谷県令であった楢取素彦が初の群馬県令となり、群馬の出番となった。

群馬県の誕生とともに始まった、前橋、高崎の県都の争いは、今も続き、まるで双頭の鷲のようである。

楢取県令は当初、高崎に県庁を置くつもりで視察に来たが、高崎には軍の兵営があり、すでに中仙道のおかげで、商業などで街は繁栄していたため、住民の反対にあう。そこで前橋の商人、下村善太郎・勝山宗三郎といった有志たちが、資金を出し合い、県庁の誘致に成功した。

時が流れ、軍の関連施設があった高崎は、太平洋戦争も終り頃になって、昭和二十年の七月から八月にかけ、六度におよぶ米軍の空襲にあり、敗戦前夜の八月十四日、日本で最後の空襲といわれたもので、高崎の街は焼け野原

になった。

昭和四十年代に、若者文化のさきがけとして、人気を博した、ラジオの深夜番組「オールナイトニッポン」で勃発した「高高・前高論争」は、明治以来の、県都に対する代理戦争（？）と呼んで「上州戦争」という。

県都については、この辺にして、このところ脚光を浴びているのは、世界遺産の登録となった「富岡製糸場と絹産業遺産群（田島弥平旧宅・高山社跡・荒船風穴）」も、多少なりとも、ドラマの中に、取りあげられるといいのだが。昭和五十年代ぐらいまでは、地方の農家で「お蚕さん」といって、養蚕をよくやっていて、蚕のために、桑畑がよく見られたものだ。今、見かけることは、ほとんどない。赤紫色の野イチゴ状の実を摘んで食べると、甘酸っぱい味がした。

今まで温泉や、スキー場以外に、認知度が低かった群馬だが、世界遺産登録と、公共放送の大河ドラマの舞台に取り上げられたことで、全国的に注目

を集める、よい機会を与えられた。県民の期待が、ふくらむというものである。

そして、二〇一六年の大河ドラマが「真田一族」というので、今度は、県北の沼田市が盛り上がりつつある。

尾瀬国立公園の入口である片品村、谷川岳の入口である水上町、近年、農産物を盛んに売り込んでいる川場村などがあるせいで、ぱっとしなかった沼田であったが、真田一族が活躍していた時代、信州上田城と沼田城を繋ぐルート、すなわち北信濃―鳥居峠―嬭恋―吾妻溪谷―中之条―高山―沼田に至るまでを、「真田道」という。今でも正式な街道ではない。「真田十勇士」で知られる、真田の秘密軍団「忍びの者」が、行き来したといわれる裏道であった。

鎌倉時代から続く沼田城は、真田信幸、信之の時に、一番栄えた。大河ドラマの脚本で、どう取り上げるのか判らないが、季節が良ければ、素晴らしい景色が見られるだろう。

シークワサー

私は沖縄で母の世話をしながら、創作三昧の日々を過ごしている。東京へは個展や展覧会、あるいは妻の両親の墓まいりの時に帰っている。

沖縄の家の庭にはシークワサーの木があり毎年実がなる。カボスやスタチのようなものだが、すこしちがう個性がある。

独特の香りがある。果肉をしほり焼き魚にかけたり、いろんな料理に使える。

私の父の弟のトウフを作っている

オジさんはミソ汁に入れて飲んでいる。ご飯にかけて食べる人もいるらしい。

私はアワモリの水割りに果実をギューとしほり一杯やる。実に爽快である。冷やした日本酒に少々落とすとこれが又、なかなかのものである。ついつい飲みすぎてしまう。

だいたい九月の下旬頃直径4cmぐらいの大ききになったら、収穫する。毎年、東京の我家へダンボールにつめて送っている。



佐川 毅彦

妻がストレッチの体操に通っているのだが、そこへ来ているバアさんたちに毎年シークワサーを配っている。とても評判がよくて、みんなに喜ばれているようだ。

東京ではだいぶ前からシークワサーの種を適当にまいていた。それらが芽を出して2m以上に育っているのが四本はある。だいたいまだに果実を収穫した事がない。

いつも十月の始め頃、上野の美術館で汎美術協会の展覧会がある。そ

のために私は出品作を七点かかえて
東京に帰った。

半年ぶりの我家の庭は草木が伸び放大、かなり荒れていた。梅の木やアズミも枝が伸びすぎていて剪定をしなければならん状態であった。大きな梅の木の影に寄りそってシークワサーの木が五cmぐらいの太さで長く伸びている。ずいぶん育ったものだを見ると、梅の枝や葉にかくれるようにして、果実が実っているのを発見した。一個や二個ではない。あそこにも、そこにも、かなりの数の果実が私を呼んでいる。

日あたりの良い頭上を見上げると、さらにたくさんさんの果実がたわわに笑っていた。



初日の出



山本千明

(ECC英会話講師)

知り合いが「離婚した」という話を聞いても驚かなくなってきた。それくらい「身近な出来事」に感じられる今日この頃。

「最近、別れる人が多いよね」と話しかけると、「そうやなあ」と相づちを打つ夫。既に目は半開きだ。

「ねえ。ちょっと、聞いてますかあ?」

「あ、うん…だから…コビー」「ん? コビー?」「ZZZ…」三分も絶たないうちに胸のランプがピコーンピコーンと鳴って「シュワツチ」と夢の世界に飛んで行ってしまう。ヤレヤレ…。

結婚生活も今年で三十二年。「夫婦の会話」は、ほぼこんな調子。仕事仕事の毎日で食事すると「充電切れ」で枕に頭がつくと同時に大酺だいばく。

子供達は、生まれて間もなく父親の顔を見て「人見知り」を覚えた。

こんな状態で何故に三十年以上もやってこれたのだろうか。

その日は「元旦」だった。私は早朝に母親に叩き起こされた。「もう! は

よせな間に合わんがな！顔洗つて着替えまい！」眠い目で時計を見ると午前四時。ひたすらに寒くて眠い。蝸牛かたつむりのようにのろのろ動く娘を見かねて母親はササッと晴れ着一式を描えがいて、次々と手際良く「蝸牛娘」に巻きつけていった。二十分程で、立派な赤いオベベをまとった「みの虫」が完成。慣れない化粧もしてようやく目が覚めてきたが、「四時四十分頃に伺います」と言つた相手がまだ現れない。

あまりにの寒さに手足が痺しびれてきた頃に、やつとお迎えの車が到着。車から転がるように出てきて「遅くなつてすみません！」と何度も母の方に頭を下げている。

「初日の出を見に海に行きませんか」と見合いから三回目のデートで私を誘つた人である。車は徳島を目指して薄暗い道をひた走っていた。「間に合ふかなあ。寝坊しちゃつて本当にすみません」と、その人はまた何度も詫わびた。

そういえばこの人、お見合い当日も

遅刻してきたつ。教員をしている叔父が「新採で来た先生でええやつがあるけど会つてみるか」という話にまずは母親が飛びついた。信頼する弟が言う「ええやつ」なら間違いないと判断したようだ。「背が高うて男前やで」という叔父の言葉に私も正直心が動いた。ところが約束の時間になつても当の本人が現れない。「おかしいなあ。日を間違えたんじゃないやろなあ」不安気にキョロキョロしている叔父の顔がパツと明るくなり、「お！来た来た！オーイ！ここやー！」と手を振る視線の先にぶよつとした男性が一人歩いている。私は咄はな嗟に背伸びをした。あの男性の背後に「男前な人」がもう一人居るハズと瞬時に推測したので。ところが近付いて来るのはその人のみ。しかも叔父に向かつて頭を下げた。叔父と私の持つ「男前」のイメージの差が明らかになつた瞬間である。背も低くはないが（実際は一七三センチ）「背が高い」と言うよりは「中背でぼつちやう」というのが初対面の印象だった。そして開口一番、叔父に言つたセリフが「遅くなつてすみません」だったなあ。

それでもその後また何度か会つたのは、話せば話すほど「価値観が似てる」と思えたからだ。「僕はきれいなものを見てきれいと言える子供を育てたいと思つてます」と、教育の事を話し始めるとぼちゃ顔が少しキリツとして見えた。毎日「激務」をこなしているようだが表情は穏やかだ。おそらく仕事モードでない時はスイッチがオフになつて遅刻したりボーとしてたりするのだらう。と「お人柄」に免じて好意的に理解することにした。

鳴門に近付くころ、少し空が白み始めた。目的地の手前ではあつたが海の見える場所で初日の出を拝むことにする。

すぐ目の前は海—という所に着いたが、目の前に立ちほだかるは背の高さほどの土手。セーターとジーンズの彼はよつこらしよと登つたが、私は動き

のとりにくい「みの虫」である。「ええい!!」とばかりに草履を脱ぎ捨て、数歩下がって助走をつけて駆け上がろうとした。勢いをつけてあとちょっと、という地点でスッと目の前に彼の右手が現われた。つかまると、ぐっと力強く引き上げてくれた。大きくて暖かな手であった。

水平線の彼方に薄紫色の雲が横に長く掛かっていたが、その間を縫い取るように白い光が走っている。うつすらと輝く光が序曲を奏でるように次第に力強くなっていき、その白い光のまん中から蜜柑色の大きな光の塊がゆるゆるとゆらめきながら登ってきた。「綺麗ですね」と呟くと「本当に綺麗ですね」と相槌を打ちながら、その光に向かって手を合わせた。私も同じように手を合わせていた。

渋滞する道に時間を取られてようやく家に辿着いたのはお昼前。娘の泥だらけの足袋を見て「ん、まあ!」と母は驚き呆れていたが「すごい綺麗やったよ」と言う「良かったなあ」と満

足そうな表情に変わった。

次の年の正月を待たず、私はめでたく「白無垢姿」となる。

それから十年の間に母が逝き、兄が逝き、娘二人の病氣や様々な問題が重なり合ってやって来た。頼りの夫は仕事に追われて家に居ない。思い返せば結構ハードな状況だったが、夫は合間で「お疲れさま」や「ありがとう」の

声掛けだけは欠かさなかった。それがまるでスツと目の前に差し出された手のようで、私はそれにつかまり、引っぱり上げながら、どんな時も踏ん張れた気がする。

あの日、初日の出に手を合わせながら、夫は「この人と結婚できますように」と祈ってくれていたらしい。

実は私も隣で同じ事を祈っていた。



この夏のこころみ



宮 本 富 夫

(高松大学 名誉教授)

私の住む高松市の南部地域は山がすぐ近くに迫り、市の中心部と比べると、気温は二〜三℃低めである。それでも夏の気温が年々高くなっていると感じる。多くの地域で、たぶん、気温の上昇が感じられているのではないかと思う。このおかげだろうか、亜熱帯性の花ハイビスカスもこの変化を感じてか、順調に育つ。今年も毎日何輪かの花をつけ、楽しませてくれている。この花の蜜を求めて、アゲハチョウ、キアゲハに加えて、ナガサキアゲハが毎日何回か採蜜に訪れる。ナガサキアゲハは南方系のチョウ、しかも大型。チョウ好きの私にはうれしいプレゼント。チョウの気持ちを感じたいから、少し萎みかけた落花前のハイビスカスを取り、花のつけねあたりを吸っ

てみる。ほんのり甘い。予想以上の量の蜜。そうだったのかと、アゲハの仲間が足しげく訪花・採餌することに納得する。そういえば、幼い頃ヤブツバキの花にたくわえられた蜜を吸ったことがある。甘い嗜好品が乏しかったせいか、子どもにとってはささやかな楽しみの一つであった。アゲハチョウはハイビスカスの花から採餌するだけでなく、隣のサンショウの葉にちやつかりと産卵。孵化した幼虫の旺盛な食欲の前にサンショウはおかげで丸裸、そして葉を失った枝にまるとした幼虫が何頭か。若い令の幼虫を餌とするのだらうか、ついでにカマキリが居座る。しかし、サンショウの枝にアゲハチョウの蛹は見つからない。どこで蛹になっているのだらうか。カマキリの

餌となってしまうのだろうか。少し気をもむが、気温の上昇が我が家の庭の環境を少し変え、そのおかげで新しい楽しみが届く。

しかし、ささやかな喜びだけでは済みそうにない。気温の上昇に伴う、体調の変化は予想以上に大変である。有効な対策を取れないかと知恵をしよう。気温上昇の主たる要因が何であるかが判明すると、適切な対策をとることが容易となるのであろうが、それはどうも難しいらしい。いろいろな要因が複雑に絡んでいるらしい。地球規模の問題であるから、要因の解析に加え、対策を実施に移す上での国と国との協力が必要とされる。ともかく、私たち市民は、夏の暑さをどのようにして乗り切るか、待たなしの対応を迫られる。対応を誤ると、熱中症という状態に陥り、生と死の境をさまよいかねない。体温調節能が充分でない幼児や高齢者には、どのように対応すべきか、解決を求められる喫緊の課題といえようか。七十歳に近づきつつある私

も例外ではなさそう。心配してか、子どもたちから「暑さは辛抱するものじゃないよ。エアコンを上手く使うのよ。水分をたっぷりにとって熱中症対策をすること、忘れないように」と、電話のたびに忠告を受ける。

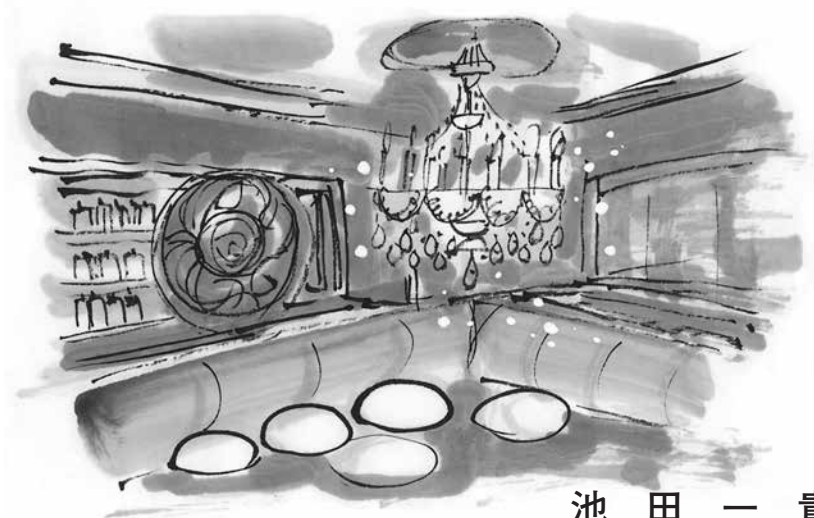
稲作と休耕田や畑の雑草対策をかねてささやかに野菜づくりを楽しむ私たちにとって暑さ対策は深刻な問題となる。主な作業を早朝と夕方に行うとして、日中の暑い盛りに野外へ出かけなければならぬこともしばしば生ずる。エアコンを使うと、外気温と室温との温度差が大きいためか、日に何回か大幅な体温調節を繰り返すこととなり、身体の体温調節機構が悲鳴をあげる。温度の変化に対応しきれなくなるらしい。自覚症状は特有のたるさ。体調不良は避けたいので、できるならエアコンを使わずに過ごしたい。そこで、この夏は、水分をうまくとり、汗をかきながら体温調節をすること、室内の温度を少し下げするために、南と北の窓辺近くに緑陰植物を育て、この植

物がもたらす冷気を風の通り道に流れもらおう試み。育てる植物はニガウリとヘチマ。ニガウリは南側の風の通り道である窓辺付近に、ヘチマは朝日を受ける北側の風の通り道に。ニガウリはプランター植えに。水不足に敏感に反応するので、朝と夕たっぷり散水。ヘチマは水田の続きの土地に植え、日々の水やりはなし。水田にはられた水が土壌に浸透し、ヘチマの根元にしみこむと想定する。南側ほど太陽の恵みを受けないだろうとも想定する。水やりなしで、予想どおりしおれることもなく生育。両方とも順調に生育し、大きく葉を広げる展開に。太陽からの光と熱が遮られ、蒸散作用の恩恵で少し冷やされた空気の流れをいただく。

風の通り道を渡ってくる自然の風、そして扇風機の助け。汗をたっぷりかき、水分をたっぷり摂り、この夏をエアコンの作動なしで乗り切ることがかった。やればできる、生物の身体とは不思議なものである。身体がうまく

調節してくれる。気温が体温近くまで上がらなかったことが幸いしたのかもしれない。エアコンの効いた部屋と室外を何回も出入りすることによる体調の不良はおこらなかったことは何よりもありがたかった。暑さによる食欲の低下もおこらなかった。夜は網戸で窓を開放すると、すこし冷気を帯びた空気が室内に静かに流れる。風とは呼べない静かな流れ、これが身体に心地よかった。思ったよりいい睡眠がとれた。夕方、ニガウリのプランターと庭にたっぷり井戸水を散水することが良かったのかもしれない。家の南側と北側には稲が育てられている。田に水が張られると、網戸から忍び込むように流れこむほんのすこし冷気を帯びた空気がさらに申し分なかった。水を張った水田の効能を改めて認識する。風の道を考慮に入れた窓の設定、窓辺に緑陰植物を上手く配置して育てること、稲作を大切にすること、休耕田にも水を張ること等、私たちがとれる有効な暑さ対策となりそうである。

なびけ、この山



池田 一 貴

もう、うちのお店も潮時かなあ……私はパソコンを前に、頬杖をついて呟いた。マンションの窓外には鉛色の空がよどんでいる。

私は鈴鹿ヒロミ。新宿歌舞伎町でクラブを経営する三十八歳の、美貌が衰えはじめた独身女。パソコン画面には店の資金繰りの危うさを示す数字が……。損益計算上は利益が出ているのに、現金のやり繰りがつかない。これで潰れたら黒字倒産。手形も出していないのに、笑いのものだなあ。

今はまだ私個人の預金を取り崩しながら店の資金ショートを補っているが、今月と来月のまとまった支払い（給料・買掛金・改装工事代金等）に預金をつぎ込むと、もう私個人はスツカラカン。にっちもさっちも行かなくなる。

再来月からは売掛金の入金が増えるので一息つける。だから、この二カ月分のつなぎ資金さえあれば……。うーん、平安銀行め。

これからシャワーを浴び、美容院へ行き、髪をセットし、化粧をして、和服に着替える——この一連の出勤仕度が、最近億劫に感じられる。

ママがこんなじゃ従業員にしめしがつかないなあ。私って、やっぱり水商売に向いていないのかしら。

「いやいや、上杉鷹山公のお言葉で気を引き締めなきや。なせばなる、なさねばならぬ何ごととも、ナセルはアラブの大統領。つて、高校の歴史の先生がよく言ってたなあ。古いギャグだぞ、と言いつつながら。でも、ナセルつてエジプト大統領じゃなかった？ ああ先生、わりと男前だったけど気持ち悪い中年男だった。イケメンでも生理的に受け付けないタイプっているのよねえ。」

あの平安銀行新宿支店の在原征也という支店次長もそう。本当かどうか知らないけど、オレは在原業平の子孫だなんて自慢するのがキモい。だつたら世の藤原さんはみんな藤原道長の子孫かよ、つてチャチャ入れたくなるよね。

いま申請している融資の件は、在原次長の胸先三寸で諾否が決まるという。「いや、オレの胸先三寸じゃなくてママの臍下三寸でしよ、決定権があるのは。ヒヒヒ」と在原は冗談めかして言ったが、あの目は笑っていないかった。根性がいやらしい。精神が卑しい。お客としてもよく来るけど、手を触られてもゾツとする。

そこへいくと、公認会計士の畠山先生は「おさわり」が上手。客席での楽しい会話のうちに、いつの間にかお尻や胸を触られていたりする。

「先生、うちの店は高級クラブですよ。おさわ

りバーやピンサロじゃありませんからね」

「うんうん、わかつてる。ボクがクラブ通いを始めたころは、こんな諺があつてね」

「ことわざ？」

「腿尻三年、乳八年」

「なに、それ」

「まあ修行年数だな。『桃栗三年、柿八年』という諺は知ってるよね。あれは桃や栗の木に実がなるのに三年かかり、柿なら八年かかる、という意味。で、おさわりなんかしちゃいけない高級クラブでは、嫌がられず上手におさわりができるようになるまでに、腿や尻なら三年、乳なら八年くらい通つて修行を積まなくちゃいけない、という意味なのさ」

「やだあ聞いたことない！」

「ママに注意されるようじゃや、ボクもまだ修行が足りんね。二十年も修行してるんだが」

畠山先生は、いやみのない中年紳士。最初はお客だったんだけど、店の税務申告をお願いするようになった。税理士と違って大企業との付き合いが多いので、そういう高級なお客を連れてきてくれる。客層のレベルアップにずいぶん貢献してくれた。客筋がいいことはお店の財産だ。

髪をセットすると、やはり気分が引き締まる。

いつものように準備万端ととのえて歌舞伎町の店に着くと、部長の滝沢が若い娘と面接していた。店で黒服たちを束ねる役割ということで部長と呼んでいるが、ナニ部長なのか決まっていな。ただの滝沢部長だ。

「あ、ママ、ちょうどよかった。この子が働きたいと飛び込んできたんですが、どうもね」

「何か問題でも？」

「身元がはっきりしないんですよ」

見ると、女優も裸足で逃げるほどの超美形だ。

年齢は二十歳前後か。

「あなた、住所・氏名・年齢が確認できる証明書、例えば免許証とかないの？」

「車の免許は持っていない。住所は、事情があつて言えません」

「ふーん、困ったわね。高いお給料を払うから源泉徴収もしなくちゃいけないし、こういう客商売は警察の管轄下にあるからねえ」

「じゃあ、学生証でも構いませんか？ でも、男の人には見せたくないんです。ママさんだけなら……」

「わかった。見せてごらん」

驚いた。東京大学医学部の大学院博士課程に在学中の超エリート大学院生だったのである。年齢

は二十五歳。見た目には十八歳でも通る若さ。しかもまったく化粧をしていないのに、うちのどのホステスよりも美しい。美貌ってこんな子のためにある言葉だ。住所は渋谷区元代々木という高級住宅地。話を聞けば、医師免許もあると小声で言う。だったら、水商売に入らなくても、医師のアルバイトで十分に稼げるだろうに。

「親に見つからないところで働きたいんです。大学には休学届けを出してきました」

「ここには自宅から通うの？」

「いいえ。あの、このお店には独身寮とかありませんか？」

「え、寮？ そんなもん、ないわよ」

なんだかワケありの様子だが、この子ならお客が呼べると判断した。よその店に採用されるぐらいなら、うちで雇っちゃえ。

「寮はないけど、あたしのマンション、四畳半が一部屋空いてるから、しばらくうちにいてもいいわよ。私は完璧なシングルで、家族も彼氏もペットもないし」

「え、本当ですか！」

二
女子学生は、小暮美緒といった。本名は伏せた

いというので源氏名を「真央」にした。真央は予想どおり客の心をつかみ、大人気を博している。素人っぽさがいいというお客が多い。化粧をしないで拔群の美人だが、ほかの子に悪いので少しだけ化粧をさせている。たちまち人気者になったが、真央は美しさを鼻にかけない。人のお客も取らない。本当のお嬢様つて、こんな娘のことをいうのかも。裕福な医者のお嬢かな？ 世間知らず。育ちの良さ。漂う気品。頭の良さ。無欲。私が男だったならこんな子と結婚したいと思う。

驚いたことに入店から一週間後に、上場企業の若い後継者（オーナー社長の息子で専務取締役）からプロポーズされた。身元も分らないのに、である。もちろん真央は断ったが、専務はほとんど毎日来店するようになった。

ほかにも、真央を気に入って来店回数が増えたお客は少なくとも十人はいる。真央在籍による売上げ増は、ざっと見て月に四百万円以上だ。

世間は不況で、もうこういう業態は時代にそぐわないんじゃないかと思っていたけれど、違う、やっぱり「人」だ。人さえ得れば高級クラブもまだ生き残れる。そう確信した。

しかし、問題は来月の資金繰り。メインバンク平安銀行の新宿支店に三ヵ月前から融資をお願い

しているが、融資課長は「こちらは次長案件となっていますので」と言葉を濁す。つまり、あの在原次長が事実上、止めている状態なのだ。財務諸表を作成してくれた畠山先生は、この財務内容なら三千万円までの融資は問題なく通るはずだと太鼓判を押してくれたのに。

あいつは一体、なんなの？ 在原つて。

「ママ、なにか悩みでも？ きれいなお顔に皺が増えますよ」

パソコンとにらめっこしている私を気づかっで、真央が顔を覗き込む。最近すこしはお世辞も言えるようになった。

「経営者の悩みよ。資金繰りなんかやつてると、体重は増えない代わりに、皺が増えるわね」

「誰かに代わってもらえないんですか？」

一瞬ハツとして、それができたら最高！ と思ったが、やはり無理無理。これができなきゃ経営者の資格はない。

心の重荷をすこし軽くしたいと、真央に、平安銀行の新宿支店次長・在原のことを愚痴った。

「えーっ、ひどい。支店長に事情を話して抗議すればいいじゃないですか」

「ところがね、どうも支店長は在原に弱みを握られていて、言いなりらしいの」

「じゃあ、メインバンクを変えたら？」

「それも考へてるけど、来月の融資には間に合わない。最悪の場合、街金融か、それとも闇金融に駆け込むか……」

「ええ？ 怖い。金利とか高いんでしょ。闇金融には暴力団がついているんでしょ？」

「うん。金利は、最低でも月五分。つまり五％ね。三千万円借りたら月に百五十万円の金利が付くというわけ。これでもマシなほう」

「えーっ、百五十万円も……」

そう。もったいないよね。非合法な連中に儲けさせるのは。でも、あの在原に臍下三寸を差し出すくらいなら、仕方がないと思う。

「私も在原さんの席には一度ついたことがあります。キザな人でした。滝沢部長に、あの席にはもうつけないでねってお願いしました。銀行員は嫌いですし」

「鋭いわね」

「私が別の客席にいたら、ボーイさんが在原さんからと言って、紙を持ってきました。その紙には和歌が書いてありました」

「和歌？」

「この紙です。——夏草の 思ひ萎えて 偲ふらむ 妹が門見む なびけこの山」

「妹が門見む、なびけ、この山、って覚えてる。高校の授業で習ったわ。『万葉集』の柿本人麻呂の歌でしょ」

「正解。さすがママですね。私はこの部屋に帰ってきて、ネットで検索してわかりました。理系だし、和歌のセンスなんてありませんか」

「長歌の最後の部分よね。今日別れてきた妻は、今ごろ夏の日差しで萎れた草みたいにしよんばりと、私を偲んでいることだろう。ああ、その愛しい人の門が見たいから、この山よ、なびいて低くなれ。という感動的な歌よね。でも、初めて会った女性にあげる歌じゃないと思うけど」

「そうなんです。ですから、どういうつもり？ って思いました。すこし嫌な感じですね」
私に臍下三寸を要求し、真央にも粉をかける、あの在原。むかつくなあ。

三

在原次長が本性を顕わした。かなり酔っている。一緒に来た融資課長によると、今夜は、うちの店で三軒目らしい。

「なあ、ママ。いや、鈴鹿ヒロミちゃんよ。どうだい、オレの女になれよ。オレと二人三脚なら、カネも体も、万事OKだぜ」

「あらあら、元気なこと。社内運動会で一緒に二人三脚に出ようってお誘いなね。OKよ」

「ふん、うまくかわしたつもりか。おいこら、ヒロミ。ここだよ、ここ。ここを密着させようってお誘いなんだよ。断るときは覚悟しろよ」

そう言つて、私の下半身に触つたので、思わずその手をはたいた。すると在原は逆上した。

「なんだ、このアマ。てめえ、ナニ様だと思つてやがる。オレを舐めてんのか!」

そう叫びながら立ち上がり、在原が思いきり平手打ちしたので、私はふっとんだ。滝沢部長が駆け寄つて、在原を制止し、「お客さま。冷静に、冷静に」となだめている。私は唇の端を切つて、血を流していたらしい。

そこへ真央がつかつかと歩み寄つてきて、在原の頬にパーン!とビンタをくらわせた。在原も私も滝沢も、あつけにとられていた。

「こ、このつ、小娘があ!」

在原が殴りかかろうとしたら、真央は、在原の目の前に、携帯電話を突きつけて言った。

「いま、おたくの銀行の会長が電話に出ています。頭取でもよかつたけれど、会長のほうが話が早いので。さあ、代わりますか?」

「なっ、何を寝言を……」

「おじいちゃま。美緒です。いま、おたくの銀行の新宿支店の在原さんという人と知り合つたの。私があなたの孫娘だと証明してくださる?」

エッ、とみんなが顔を見合わせた。

ただし、在原は「つまらん小細工を。オレは騙されんぞ!」と、真央の携帯電話を床に叩きつけた。無残にも完全に壊れたようだ。

真央が壊れた携帯を拾おうと身をかがめたと、在原はその横顔を蹴り上げようとした。とつさに、常連客である上場企業の若い専務が、在原の顔面にパンチを入れ、真央を救つた。

「あら。ありがとう、専務さん」

それから、ほんの三分もたたないうちに、在原次長と融資課長の携帯電話が相次いで鳴つた。本店の秘書課から緊急連絡で「小暮会長がお孫さんを探しておられる」というのだ。さすが大手銀行、深夜でも秘書課は稼働している。

次長と課長の二人は酔いが醒め、顔面蒼白になつていた。

この若いホステスは本当に、平安銀行会長の孫娘だったのか? もし、そうだったら、自分らはどうなるのか? ただでは済まないだろう、と、そんな怯えた顔をしていた。

真央、いいえ美緒は、私の携帯電話を使つて、

お祖父^{じい}さんに事情を説明した。どうやら彼女は、見合いを強制されたのが嫌で、家出をしたらしい。祖父は平安銀行の会長、父は大病院の院長、叔父は平安銀行の頭取、というエリート一族だ。その家系に加えて、目も醒めるような美人。頭脳も超一流。なんだか、世の中、不公平だなあ、という気がした。

でも美緒は、在原の悪行を祖父に言いつけたりしなかったらしい。そのかわり、私の店への融資を最優先で実行させた。在原はもう私の言いなりである。美緒ってやつぱり頭いいな。

世の中、不公平だけど、でも、目の前の邪魔な山がなびいたような、見晴らしのよさが出現したのも、その不公平の力だから、まっいいか。美緒、またお店に遊びにおいでよねっ。

(了)

【この物語はフィクションです】



(表紙説明)

■さぬき庵治石硝子

さぬき庵治石硝子の作品の中でも、冬には雪だるまや鏡餅がギャラリーに登場する。

表紙写真は、中までぎつしりガラスでできた鏡餅。絹の水引を締めて、めでたく座る長寿の福餅。

Rie Glass Garden

所在地／香川県高松市松福町二二二一七

TEL／〇九〇-四七八二四六八一

「酒林」随筆特集 第九十一号

平成二十八年一月一日発行

発行人 西 野 信 也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

〔本 店〕	
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133
〔高松本社〕	
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8	☎087-835-4133
〔高松支店〕	
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40	☎087-851-4133
〔丸亀支店〕	
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70	☎0877-23-4133
〔徳島支店〕	
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4	☎088-653-4133
〔松山支店〕	
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1	☎089-975-4133
〔岡山支店〕	
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209	☎086-296-2136
〔洲本支店〕	
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28	☎0799-22-0788
〔大阪営業所〕	
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14	☎06-6877-2671
〔東京営業所〕	
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12	☎03-3686-4133
〔観音寺物流センター〕	
〒769-1613 香川県観音寺市大原町花稲1071-1	☎0875-56-3133
〔多度津工場〕	
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880	☎0877-33-4133
〔琴平工場〕	
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133
〔金陵の郷〕	
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地	☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

〔大阪本社〕	
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9	☎06-6262-2444
〔大阪支店〕	
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9	☎06-6262-2447
〔東京支店〕	
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F	☎03-3552-3427
〔名古屋支店〕	
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F	☎052-561-5531
〔北陸営業所〕	
〒918-8231 福井県福井市間屋町3-815 和中ビル1F	☎0776-24-0967
〔上海西野貿易有限公司〕	
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号	☎+86-21-6278-9548
〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO., LTD.〕	
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110	☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend. Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA	☎+62-21-2993-0822
--	-------------------



西野金陵株式会社
四国・琴平